

京鹿子娘道成寺

長唄 全詞章

藤本斗文

作詞

初世杵屋弥三郎

作曲

宝暦三年（一七五三）三月

江戸中村座

〔三下り・乱拍子／鐘尽くし〕 鐘に恨は数々御座る、初夜の鐘を撞く時は、諸行無常と響くなり、後夜の鐘を撞く時は、是生滅法と響くなり、晨鐘の響は生滅滅已、入相は寂滅為楽と響くなり、聞いて驚く人もなし、我も後生の雲晴れて、真如の月を詠め明かさん

〔二上り・恋の乱れ〕 言はず語らぬ我が心、乱し髪 of 乱るるも、つれないは唯移気な、どうでも男は悪性者

〔廓尽くし〕 桜桜と諷はれて、言うて袂の訳二つ、勤めさへ唯うかうかと、どうでも女子は悪性者、都育は蓮葉なものぢやへ

恋の別れざと武士も道具をふせ編笠で、張と意気地の吉原、花の都は歌で和らぐ島原に、勤する身は誰と伏見の墨染、煩惱菩提の撞木町より、浪花四筋に通ひ木辻に、禿立から室の早咲、それがほんに色ぢや一ツ二ツ三ツ四ツ夜露雪の日下の関路も、共に此身を馴染重ねて、仲は丸山ただ丸かれと、思ひ染めたが縁ぢやへ

〔花尽くし〕 梅とさんさん桜は何れ兄やら弟やら、わきて言はれぬ花の色へ

あやめ杜若はいづれ姉やら妹やら、わきて言はれぬ花の色へ、西も東もみんな見に来た花の顔、さよほへ、見れば恋ぞ増すべ、さよおへ、可愛らしさの花始

〔恋の手習い〕 恋の手習いつ見ならいて、誰に見しよとて紅鉄漿つきよぞ、みんな主への心中立、才嬉し嬉し、末は斯うぢやに然うなるまでは、とんと言はずにすまそぞへ

と誓紙さへ偽りか嘘か誠か、どうもならぬ程逢ひに来た、ふつとり愠気せまいぞと、矯めて見ても情けなや、女子には何がなる、殿御殿御の気が知れぬ、悪性な気が知れぬ、恨み恨みてかこち泣き、露を含みし桜花、さはらば落ちん風情なり

〔山尽くし〕 面白や四季の眺や、三国一の不二の山、雪かと思れば花の吹雪か吉野山、散りくる散りくる嵐山朝日山、朝日山を見渡せば、歌の中山石山の、末の松山いつか大江山、いくのの道の遠けれど、恋路に通ふ浅間山

ひと夜の情有馬山、いなせの言の葉あすか木曾山待乳山、我が三上山祈り北山稻荷山、縁の結びし妹背山、ふたりが中の黄金山、花咲ゑいこのこの姥捨山、峰の松風音羽山、入相の鐘を筑波山、東叡山の月の顔、三笠山ただ頼め

氏神様が可愛がらしやんす、出雲の神様と約束あればつひ新枕、廓に恋すれば浮世ぢやへ、深い仲ぢやと言ひ立てて、こちやこちやよい首尾で憎らしい程いとしらし

〔鞠唄・手踊〕 花に心を深見草、園に色よく咲き初めて、紅をさすが品よく姿よく、ああ

姿優しやしほらしや、さあさあそうぢやいなそうぢやいな五月五月雨早乙女、五月雨早乙女、田植唄、田植唄、裾や袂を濡らしたさつき、花の姿の乱れ髪

〔鐘入り〕 思へば思へば恨めしやとて、龍頭に手をかけ飛ぶよと見えしが、引被いでぞ失せにける

〔所化・鞠鼓〕 謡ふも舞ふも法の声、エエ何でもせいせい、春は花見の幕ぞ床しき、夏は屋形の舟ゆかし、よいよいよい、ありやりやこりやりやよいとな、秋は武蔵の月ぞゆかしき、冬は雪見の亭ゆかし、よいよいよい、ありやりやこりやりやよいとな

〔祈り〕 浮に浮れて第一宇宙に迷うた、懺悔懺悔六根罪障、南無不動明王、南無不動明王、アア何でもせいせい、動くか動かぬか、なまくさばんだばさらんだ、こりや動かぬぞ真言秘密でせめかけせめかけ、数珠のありたけやつさらさやつさらさ

せんだまかろしやな何のこつちやへ、そはたらうんたら何のこつちやへと祈りける

〔納め〕 謹請東方青龍清浄、謹請西方白体白龍、一体三千大千世界の恒沙の龍王哀愍納受、何国に恨のあるべきと、祈り祈られ飛上り、御法の声は金色の花を降らせし其の姿、実にも妙なる奇特かや